**釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会**
**再生普及行動計画ワーキンググループ（第 15 回）　議事要旨**

日時：平成 21 年 4 月 24 日（金）18:30～20:40
場所：釧路地方合同庁舎　4 階　共用第三会議室

【出席者（敬称略）】

再生普及行動計画ワーキンググループ構成メンバー

＜個人（所属）＞

- 金子正美（酪農学園大学環境システム学部地域環境学科教授）
- 清水信彦（個人）
- 新庄久志（釧路国際ウェットランドセンター主任技術員、環境ファシリテーター）

＜団体（出席者）＞

- NPO 法人釧路湿原やちの会（雑賀重二）
- 釧路武佐の森の会（大西英一）
- 釧路市民活動センターわっと（成ヶ澤茂）
- こどもエコクラブくしろ（近藤一燈美）

＜関係行政機関（出席者）＞

- 北海道開発局釧路開発建設部治水課
  （流域計画官／山村諭、河川環境係長／法村賢一）
- 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所
  （所長／北沢克巳）
- 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター
  （所長／中島章文、自然再生指導官／朝倉基博）
- 北海道釧路支庁　（環境生活課自然環境係主任／石井弘之）

再生普及小委員会（所属）

＜個人（所属）＞

- 高橋忠一（個人）

再生普及行動計画ワーキンググループ事務局

- 環境省北海道地方環境事務所　国立公園・保全整備課課長補佐（伊藤俊之）
- 釧路湿原自然保護官（露木歩美）
- 財団法人北海道環境財団（久保田学、内田しのぶ）

【議事概要】

〈事務局〉第 15 回再生普及行動計画ワーキンググループ（以下「行動計画 WG と表記」）を開催する。前回以降の事務局環境省の異動に伴い、冒頭、伊藤課長補佐より挨拶。引き続き新任メンバーの紹介と挨拶（林野庁朝倉自然再生指導官、北海道釧路支庁石井氏、国土交通省北海道開発局釧路開発建設部法村氏）。また、江崎委員と永瀬委員退任の報告。（資料確認後、新庄座長による進行。）

**議事１　ワンダグリンダ・プロジェクト 2008 の報告について**

〈事務局〉（資料 1－1 に沿って説明）資料では 42 団体・個人、69 取組みの報告とあるが、今後も数件報告される予定で、最終的にはもう少し増える予定である。

〈座長〉以前はコンサルタント会社が参加してくださっていたが、2008 年度は建設会社や雑貨店の参加があった。

〈事務局〉（資料 1－2 に沿って説明）報告書の作成概要案について、アンダーラインのあるところは昨年度からの変更点である。今年度は 3 回のイベントでの配布を予定している。

〈座長〉前年よりも報告が増え 100 頁ほどになる。また、参加のメリットについても巻末に触れる予定である。

〈委員〉表紙の色は？

〈事務局〉冬の湿原のイメージで白とした。

〈委員〉印刷部数は、これまで 1000 部くらいだが、足りるのか？

〈事務局〉前年度分の在庫は残部 10 部程度。くしろエコフェア等で配布した効果もある。

〈座長〉今度が４冊目だが、５冊くらい出ると、「バックナンバーがほしい」という声も出てくるかもしれない。学生の研究対象になる可能性もある。

〈委員〉電子データはあるのか？

〈事務局〉北斗の野生生物保護センター（WG 事務局）には全てそろっており、見てもらうことはできる。電子データもあり、協議会内にある行動計画 WG のサイトから見ることができる。CD-R での提供も可能。

〈座長〉他の人に見せたときの反応は何かあるか。

〈委員〉学生には評判がよく、資料として使っている。卒業生が遊びに行くときなど、釧路市民活動センターわっとで入手し、持って帰っているようだ。

〈座長〉先般、東日本ブロックの自然再生会議で配布したが、他の地域の関係者が幅広い取り組みに感心していた。

**議事２　2008 年度行動計画 WG の取組み報告**

〈事務局〉（資料 2 に沿って説明）昨年度開始した新たな取組の状況を報告。情報発信の拡充について、現在「広報くしろ」と「広報つるい」にて情報掲載をしてもらっており、机に置いてあるのでご参考まで。

**議事３　ワンダグリンダ・プロジェクト 2009 の応募状況について**

**議事４　2009 年度行動計画 WG の予定（案）**

〈事務局〉（資料 3 に沿って説明）新規応募者には★印がついている。今年は 6 団体・個人から新規応募があった。現在 39 団体・個人、69 取組みである。まだ昨年度応募者から連絡いただいていないものもあり、今後も増える予定である。（資料 4 に沿って説明）昨年同様にフィールドワークショップを 2 回、推進サポーターの募集、情報発信の拡充、知名度調査アンケートを実施する予定。また今年度は普及行動計画見直しも予定しており、それについては議事 5 で詳しく説明を行う。ワンダグリンダ・プロジェクト 2009 応募取

組みや WG の予定など、年間スケジュール（一覧表）も作成したのでご参考まで。

〈座長〉応募はまだ数件増える見込み。新しい参加者もあり、ホテルの参加や、アイヌ語を通した取組などもある。一覧表を見ると、11 月と 12 月はまだ隙間がある。

〈委員〉2008 年度は知名度調査アンケートはやらなかったのか？

〈事務局〉資料には書かなかったが、実施している。

〈委員〉以前、アンケートのサンプル数を、ＷＧメンバーも協力して増やすことが提案されていた。これをやっていった方がいいのでは。また、余力があれば報告書を渡すなどしてもいい。

〈委員〉１日の調査では、人の少ないところではサンプル数を稼げないのでは。

〈座長〉アンケート場所についてのご助言等はあるか？駅はどこでやっているのか？

〈事務局〉JR 釧路駅前の広場で行っている。バスの利用者等も歩いている。アンケートは、のべ２日間かけて行っている。温根内 VC は歩行者が少なく、人がやってくる時間帯を過ぎるとアンケートがとれなくなる。ジャスコ釧路店などは多数アンケートをとることができる。毎年３人でやっているが、人数がいればやりやすくなる。ＷＧメンバーで手伝っていただけると、とてもありがたい。

〈座長〉協力を得ながら知名度調査を今年度もやっていただきたい。

**議事５　再生普及行動計画の見直しについての検討**

〈事務局〉（資料 5 に沿って説明）今回事前に送付したアンケートは、ここでの意見出しのために事前にお願いしたものであり、必要であればさらにご記入いただき、本日最後に事務局にお渡しいただきたい旨、ご案内。引き続き事前送付資料に基づき、10 の項目ごとの応募状況や参加団体数の推移、知名度アンケート結果、学校へのアンケート結果の概要等を説明。今の行動計画が目的としている、環境教育や市民参加の促進という目的に対して効果的であったか、効果的で無い部分があったならどう改善していけばいいか等について、意見をうかがいたい。

〈座長〉（事前資料でその推移を確認）10 の項目の関係を、事務局から説明をお願いしたい。

〈事務局〉（10 の項目の相互の関係を説明）まず大きな目的としては「自然再生の仕組みや動きを広める」（提言 3）ことになるが、そのためには「人々の湿原への関心を喚起する」（提言 1）必要がある。その手段の一つとして「湿原と人の関わりの歴史を知る」（提言 2）がある。一方、「自然再生の仕組みや動きを広める」（提言 3）ためのステップとして「自然再生への地域、市民の参加を促す」（提言 5）があるが、その推進力となるものが「自然再生への幅広い支援・協力を求める」（提言 6）である。次に、参加を促すだけではなく「湿原と継続的な学びの機会をつくる」（提言７）が必要となる。ここまでの取組みを行うなかで必然的に「人、施設、地域のネットワークをつくる」（提言 10）ことになる。また、それらを進めるうえで、「情報公開や合意形成を進める」（提言 4）ことが必要であり、自然再生事業が行われている釧路湿原は国立公園でもあることから「国立公園の新しい利用形態をつくりだす」（提言 8）、「湿原を訪れる人へのサービスを改善する」（提言 9）ことも必要となる。これらの流れを促進することにより行動計画の目的「釧路湿

原自然再生にかかる市民参加と環境教育を一層推進する」が達成できるのでは、と考えた。

〈座長〉4 年間やってきた中で見えてきた流れを説明した。取組み数の濃淡をつけると、提言 1（人々の湿原への関心を喚起する）、5（自然再生に地域・市民の参加を促す）、7（湿原と継続的に関わる学びの機会をつくる）の取組みが多く、提言 2（湿原と人との関わりの歴史と今を知る）、3（自然再生の仕組みや動きを広める）、4（自然再生について情報公開と合意形成を進める）、6（自然再生への幅広い支援・協力を求める）10（人・施設・地域のネットワークをつくる）は中ぐらい。提言 8（国立公園の新しい利用形態を創り出す）9（湿原を訪れる人へのサービスを改善する）は少なかった、という WG 事務局の感想である。10 の項目の中で、6 つ（提言 1、3、5、6、7、10）が核になる取組みで、それを補うように 2 つ（提言 2、4）あって、その結果反映する取組みとして 2 つ（提言 8、9）がある、ということ。

〈委員〉スタートした時にはいろいろな夢もあったが、実際に動いてみると目標の修正が必要だったこともあるかもしれず、個々の項目ごとに記載されている「計画期間に行う取組み」を組み替える必要性があるかもしれない。普及行動計画は、元は自然再生が目標としてあり、自然再生がどれだけ進んだか、またそのための市民参加がどれだけ進んだかの２つをみる必要がある。そして振り返ってみて、個々の目標達成のペースが遅い又はこれで良いか等を考えてみればよいのではないか。時間的スケールでの短期的・長期的な目標があり、また数値化できるものとそうではない目標が混在している。「計画期間に行う取組み」を組み替えるならば、短期的に数値目標を出せるものと、そうではない長期的なもの、というように、時間スケールにより整理してみてはどうか。

〈座長〉スタート当初、市民参加の普及再生に向けたシンポジウムを行い、そこでは 12 の提言が出た。これは釧路川流域の検討のときに 12 の提言があったのでそれに沿ったものであり、それを 10（の提言）に統合したという経緯があった。次の計画の 5 年間は、短期的に数値的な目標を持てるものと、数値化できないが将来的な目標とに分けては、という意見である。

〈委員〉最初の自然再生の目標は、湿原をラムサール登録時の状態に戻すこと。そのためには、市民参加が必要ということだった。

〈座長〉市民参加の度合いを数値化することも必要か。

〈委員〉大西委員にお聞きしたいが、長年ＦＭくしろで放送をしていて、反響の違いは見えてきているか？

〈委員〉全国から反響は来る。反応は増えてきている。

〈座長〉ワンダグリンダへの応募も増えてきている。そうした大まかな広がりは見えてきている。

〈委員〉アンケートでは知名度が下がっているようだが、こちら（釧路）での実感はどうか。

〈座長〉私の感覚では、湿原への関心は、一般市民や主婦層、高齢者層では高まってきていると感じる。しかし、学校教育、研究者や湿原保全に取り組んできている人たちからは、湿原そのものよりも、「今の湿原はどうなのか」、「自然再生はどうなっているのか」に関心があると感じる。しかしそうした情報が十分に得られているわけではない。2008 年は自然

再生はメディアにもあまりのらず、一般には忘れられかけているかもしれない。

〈委員〉知名度が下がったのは、メディアでの取り上げが減ったことが関わっていると思う。旅行代理店の企画担当者の話では、値下げ競争の中で、道東ツアー観光は４日間から３日間になりつつある。その中で、釧路湿原は誰でも知っていて関心はあるが、そこに時間を割く余裕がなくなり、バス移動中に車窓から湿原の景色を見せている、という話だった。不景気もあって、ゆったり旅行できず、湿原が削られている、ということか。

〈委員〉観光客自体も減っているのか。

〈委員〉ＪＡＬツアーの今年の扱いは 1000 人程減っている。

〈委員〉毎年 2 月に屈斜路湖でキャンプするが、毎年いる台湾等の観光客が、今年の冬は「０」だった。

〈委員〉2008 年は温根内によく行ったが、観光客は両極端。個人は歩きたがるが、団体は温根内遊歩道入り口で「20～30 分間で戻るように」と言われるらしく、「その時間でどこまで行けますか」とよく聞かれた。そのような観光が増えているようだ。釧路湿原を知りたくて来る個人と差が大きい。

〈座長〉今までは、団体をガイドさんが遊歩道を連れて歩いたが、そこに我々が介入する余地ができた面もある。学校は、以前は「観察会をしてください」と行ってきたが、今は「湿原について、どんな題材（教材）があるか」と聞いてくるようになった。これも「しめた！」と思えるところで、そこで自然再生の話を売り込んでいる。

〈委員〉学校も、湿原を熱心に学ぶところとそうでないところと偏りがある。何度も通い、冬でも歩くスキーをしに来たり、湧水を見に来るようなところもある。

〈委員〉修学旅行の形態も変わっており、学年全員ではなく、分散してグループで来るようになっている。また、関西からの航空便がなくなり、修学旅行での湿原訪問もキャンセルになってきている。

〈委員〉釧路湿原やちの会での話を紹介する。文科省等で自然学習の補助金を出している。例えば、大妻女子大付属校が２年間かけて湿原学習の綿密な計画を出してきている。こちらからも協議会のパンフや国立公園の資料を全員分送った。「湿原を通した自然学習は釧路がいい」ということを、私たち自身がもっと働きかける必要があるのでは。関心のある学校はあり、それがつながれば、資金調達もできる。

〈座長〉そうしたモデルを次のステージで具体的に考えていけるといい。

〈委員〉そうしたところで配るパンフレットとはどんなものか？

〈委員〉国立公園連絡協議会のパンフレットを全員に配っている。学生たちはあらかじめ勉強してくる。

〈委員〉自然再生のパンフレットは、最近作ったものはあるか？

〈委員〉国交省は２年前につくっている。大きな変化がないとお金もかかるのでなかなか作り直せない。

〈委員〉釧路湿原は残された豊かな自然のシンボルと位置づけられ、それを味わう形が多いが、これからは、湿原の劣化や自然再生の必要性について、来訪者や旅行の企画者に訴え、説明していかなければならない。これはまだあまり進んでいない。

〈委員〉札幌にくる修学旅行生への体験メニューについて、旅行社から相談を受ける。かつては物見遊山が中心だったが、最近は「役に立った」と思えることが求められる。ウチダザリガニの駆除などのイベントを作れないか、という相談もある。湿原に来るだけではなく、何か貢献して帰れるメニューが必要なのかもしれない。

〈座長〉自然再生に参加できる具体的なプログラムの必要性が見えてきた。

〈委員〉新しいパンフレット作成する予定は？

〈委員〉既存パンフレットの更新は行うことになる。

〈座長〉これからの実施計画もあり、中身の更新も必要になるのではと思う。例えば、面積は具体的にどう変化したのか、植物群落は 10 年前と比べて増えたのか減ったのか、といった情報が必要とされている。自然再生の東日本ブロック会議では、釧路湿原には「守るべき自然がある」ことに釧路の強みを感じる。

〈座長〉WG 事務局が素案を作るに当たっての意見は他にはどうか？

〈事務局〉現在 10 項目の取組みがあるが、重点化等についてのご意見があれば、見直しの参考にさせていただきたい。

〈委員〉先ほどの大西委員の話は、資料や情報を提供するというもので提言 9（湿原を訪れる人へのサービスを改善する）に沿った話だと思う。今年は釧路プリンスホテルがワンダグリンダ 2009 に参加してくれているが、宿泊客がアメニティを使わなかった分を自然再生に貢献するという動きは、東急インはもっと前からやっている。提言 10（人・施設・地域のネットワークをつくる）を見据え、釧路のホテルはみんなそうした取組みを通じて釧路湿原に還元するような働きかけをしていくとよいのでは。

〈座長〉提言 9、10 についてもっと具体的なプログラムを提供していってはどうか、という意見。現在の計画では、趣旨と計画期間に行う取組みに分けているが、今いただいた意見は「計画期間に行う取組み」という部分に反映できるような意見である。

この後、4 月 30 日までに、さらにアンケート用紙に意見を書き込んでいただいて、できるだけ 10 の項目に対して具体的にご助言をいただきたい。

〈委員〉いままでのお話は来訪者へのアプローチが中心だが、地元住民にどう働きかけるかについてのアイデアはないだろうか。

〈座長〉釧路の人はホスピタリティーに優れているが、身内（地元）にどう働きかけていくかについても考えたい。

〈委員〉外から釧路に来て滞在する人と、全く来ない人がいる。アピールする対象をいくつかのケースに分けることができる。そうしたアピール対象のカテゴリー分けを明確にしては。

〈座長〉来訪者、地元、若年層、大人向け等、ターゲットを明確にして計画を立てる必要があるということ。

〈委員〉例えば、提言 1 の出張展示や移動講座を札幌でやる等。釧路以外の無関心な人にアピールする取組みは十分にできていない。「ホームページで見せている」といっても関心ある人しか見ない。そうした「pull 型」（引っ張る）ではなく、「push 型」（押し付け）が必要。

〈座長〉「押し売り型売り込み」が必要と言うこと。インターネットを開いても、普通は自然再生のサイトなどにアクセスしない。

〈委員〉四国八十八カ所回りは極楽に行けるというメリットがある。自然再生のボランティアにもそうしたインセンティブを設けてはどうか。５回参加したら 1000 円税金を安くする、名前をどこかに出す等あってはどうか。

〈委員〉「全国の自然再生サイト回りのスタンプラリー」、「道の駅スタンプラリー」のようなメリット。

〈委員〉話題として取り上げられたり、関心のない人を引きつける案は必要と思う。例えば、湿原マラソンを 30km ではなく正式のフルマラソンにすることを検討する動きがある。そこで釧路湿原が紹介されるなど、ささやかな副産物であってもいいと思う。もう一点、若い人への学校教育への押し売り的働きかけも必要。

〈座長〉折に触れて再生事業に関われるような取組みを広げよう。そのときに、ターゲットを意識して働きかける、ということ。

〈座長〉10 の項目についてのご意見はないか。大枠は、次期もこれでよいか？多すぎないか？

〈委員〉座長はどう思うか？

〈座長〉数が多いカテゴリーは参加しやすいが、提言 2（湿原と人との関わりの歴史と今を知る）などは知識がないと参加できないし、提言 4（自然再生について情報公開と合意形成を進める）なども引いてしまう。提言 8（国立公園の新しい利用形態を創り出す）9（湿原を訪れる人へのサービスを改善する）は行政の仕事では、という意識があるのだろうと思う。提言 9（湿原を訪れる人へのサービスを改善する）はホテルの参加もでてきているので変わるかもしれない。また、提言 2 は提言 1（人々の湿原への関心を喚起する）や 3（自然再生の仕組みや動きを広める）に取り込めるかもしれない。

〈委員〉先ほどの説明のとおり、各項目に因果関係もあり、10 の項目をいくつかにまとめてもいいのかもしれない。

〈座長〉提言 6（自然再生への幅広い支援・協力を求める）は、自分達がやるのではなく、人に働きかける点で他と異なる。長期的な展望を持ってやらなければならないものは取組み数は少ないのでは。

〈座長〉それでは、4 月 30 日までに、記入して事務局に提出をお願いしたい。

〈委員〉行動計画としてまとめる上ではフレームは大切だが、実際に行動するためには、各項目の下部の具体的な記述こそが大切。「計画期間に行う取組み」ができたのかどうかを一度評価してみてはどうか？

〈事務局〉今回資料を出していないが、事務局で作業し、整理してある。Ａ３版で 10 枚ある。

〈座長〉WG 事務局が行動計画素案を提案するときに、資料として添付することにしたい。

〈委員〉先ほど話したように、札幌で再生事業を紹介する企画をやりたい。そのためのパネルや床に敷く地図などは、提供いただけるのか？

〈事務局〉パネルは今、新宿御苑に貸し出しているが、通常は野生生物保護センター2 階に展示しており貸し出しは可能。地図も保管してある。

〈委員〉そうしたものこそ学校等を巡回できるとよい。札幌の書店がフロアをイベントのために貸している。企画に関連した本が売れればいいという目的である。そこで釧路湿原のことを紹介できればと思う。

〈座長〉本日いただいたご助言を生かして WG 事務局で素案作りを進めたい。有志のご協力やヒアリング等もお願いしたい。

〈事務局〉これで第 15 回行動計画 WG を終了させていただく。

以上